

春燈

7

月号

July 2014



主宰の句

安立公彦

灯ともすや常の家居の夏めきぬ

さみどりの彩やかをりや露料る

末弟の独り修すや傘雨の忌

下総や植田千枚千の風

朔太郎忌の虹や街空去りやらず



成瀬櫻桃子の句

残菊の寒さきのふにまさりけり

『風色』昭和四十八年

昭和五十二年七月、俳人協会発行の自註現代俳句シリーズ・I期14に、春燈創刊の一月から投句したが毎号没で、もう止めようと諦めた頃入選した句で忘れ難いと記されている。敗戦後の焼跡に結核に悩まされながら、句作だけをせめてもの生き甲斐として必死に生きておられたのではなからうか。私も全く同じような境遇で日々を過ごしていたので身につまされ心に残る句となっている。

小 張 昭 一

成瀬櫻桃子の句

日蓮遺墨頑固書体や春みぞれ

「春燈」平成十三年

平成十三年三月三十日、安房小湊での千葉大会は時ならぬ春の霽となり、全員雪まみれでホテルに戻った。千葉大会の天候はよく荒れる。けれども、この日の春霽にはびっくり。小湊誕生寺へ詣でられた櫻桃子先生は日蓮の「遺墨」に目をとめ、「頑固書体」と的確に表現された。二日目は打って変わって快晴。後日、あらためて中山法華経寺にある日蓮の「立正安国論」の書を見て納得した。

栗原完爾

燈下集

○ 園部 落郷

雪解村水音たかく動き出す
断末魔の声あぐ閑の雪解渦
花の道土手が曲がれば曲がるなり
雄物川源流は泡水芭蕉
門灯のほかは漆黒青葉木菟

○ 松橋 利雄

初桜むかしを思ひ出しにけり
養花天遅れのバスの着きにけり
花の雨人形町に迷ひけり
花冷や天狗の鼻の剥落す
子をあやすマリア観音飛花落花 (秩父・金皇寺)

○ 小島 禾汀

過疎の郷火の見櫓の暮春かな
見て育つ文化遺産の五月富士
梅は実に好日の詩いくつ得む
柿若葉いざ鎌倉の往還路
青葉密や山伏谷の照かげり



○ 柴崎 富子

色を名をはばかり気なし蛇莓
夜桜を観に行く紅を引き直し
桜葉降るや片耳ピアス揺れ
惜春や川越夜舟着きし河岸
朧夜や待たされて盃重ねをり

○ 橘 正義

一樹一樹花はまだかと見上げたり
初燕見知らぬ人と声交はし
四月馬鹿一日中草引きにけり
バスを待つ正面辛夷咲初むる
鎌倉の散る花を見る集ひかな

○ 小林のり人

口開かぬ椀の一粒浅蜷汁
田毎に水ゆきわたり夕蛙かな
花魁の足八の字や花吹雪
流れとはみえぬ流れや花筏
商店街シャッター通り夏燕

○ 三上程子

陽炎や記憶の底に飛行音
顎ひいて写しますよと花の下
夜桜にかなふ昔の話して
対岸の刑場跡や霾ぐもり
ゆつくりと言葉をさがし春惜しむ

○ 井上春子

春昼や小さな虫のよく動き
春の蘭かさりと足の骨折れぬ
若葉寒ストレッチャの乗りごこち
五月来るカーテンに風よくからみ
自転車を並んでおして花菜道

○ 中野あぐり

ポンプ井戸露地に残りし小暑かな
青田より雨降り始む総の国
波の上走るさざ波明易し
人も木も遠き隔たり夕端居
妹「律」のその後は知らず獺祭忌

○ 諸戸せつ子

遅桜うしろの道は海に向き
飛花落花浴びてひとりや弘前城
風吹いてお濠の落花割れにけり
津軽三味線に余生のひとひ花の宵
花吹雪両手広げて走る子ら

当月集

安立 公彦選



○ 西岡啓子

杭のぼる池のしめりや鳥曇
新しき切株あまた涅槃西風
親を呼ぶこゑの高きや雀の子
散り敷きてなほ満開のさくらかな
ふるさとを捨つるにあらず母子草

○ 齋藤晴夫

神代桜咲いて曾孫の一年生
清明の八雲かがよふ御神鏡
借景の落花しきりや石の上
たかななや東京とても里山の
年寄に禍福門なし花の雨

○ 茂木なつ

生きすぎとは口だけのことさくら鯛
競ふ牡丹まづ庭石に誉めらるる
若楓思ひ生れそな風の彩
大利根を越えしかとんび夏霞
こでまりや女子会とふも卒寿ぬて

○ 川崎真樹子

折鶴のそろはぬ嘴や憲法記念日
夏に入る身の重心を低く据ゑ
町筋にわたる糠雨傘雨の忌
恋ひ焦がれ胸まで赤き水鶏かな
何急ぐ蚯蚓の腹の伸び縮み

○ 藤丸誠旨

やはきもの抱き見てゐる春夕焼
雲もまた流離の憂ひ春の果
行く春や赤児の眼まだ見えず
夏に入る君傍らに眠るとも
朝よりのこでまりの揺れ万太郎忌

春燈の句

安立 公彦選

毛糸解くや手よりころげる遅日かな

千葉 吉村さよ子

溜息のきこゆる文や五加飯

ちらし文一人静の咲く夕べ

八重桜すきまの空のゆとりかな

山の手線見下ろす土手の桜かな

初蝶の訪問受くる狭庭かな

東京 池田 節

ぶらんこに掛けて寛ぐ昼下り

湯上りの宿の窓辺や若楓

花筏水にでこぼこありにけり

三重 上野 進

着疲れの跡も吊され花衣

水番へ木札一枚辞令とす

焙られて哀れ目刺に目玉なし

観音に尽きぬ祈りや春の蝶

藤房のかすかに揺る風の道

東京 坂入 妙香

てふてふの草体に飛ぶ昼さがり

蝶の昼読書に時を忘れけり

行く春や寝ねられず聴く「深夜便」

自画像の惜春の瞳や無言館

新茶汲む知覧の旅を語りつつ

湧水の砂噴きあぐる五月かな

制服の白きカラーや若葉風

千葉 鶴岡 紀代

花の寺巡り納むる朱印帳

四迷忌や肩先冷ゆる一人の夜

小判草足許に触れ干潟径

つくばひの花一片を惜しむかな

花冷や湖のにほひの遊覧船

まなかひに富士を仰ぎて春惜しむ

葉桜となりて重たき並木かな

埼玉 中里よし子



余言

安立公彦

蝌蚪の紐スタップ細胞有りや無し 片桐てい女

一月、理研の小保方ユニットリーダーからSTAP細胞の発表があり、続いて四月九日同氏が開いた記者会見での応答のニュースは、日本中の注目を浴びた。一つは、氏が三〇歳の女性であること、更に研究中のエプロン姿が意表を衝くものだったことにも因る。大方の意見が、その細胞実験に否定的だったのは周知の通り。その中で、文藝春秋六月号の、立花隆氏の意見は納得されるものだった。「…検証実験をやるからには、先入観にとらわれず、あらゆる可能性を見据えながらやって貰いたい」。その通りだ。

いま仮にこの句の中七下五を示して、これに相応しい上五を記せ、という設問を出したとする。季節的に春の季語に集中するのは当然のこと。「春惜しむ」「余寒なほ」、更に「陽炎や」など考えられよう。しかし作者は、「蝌蚪の紐」と付ける。予想外の季語であるが、反面紐と細胞が絶

妙に結びつき、壮大な研究内容とみごとに渡り合っている。お玉杓子は何れ蛙になる。「有り」としたい。

引鶴をとどむる雲もなかりけり 佐藤 信子
喪ごころに磨る薄墨の暮春かな 栗原 完爾

両句とも四月本部句会での作品。三月二〇日に逝去された松本俊介さんへの悼句である。今月号の出句には、先月に続いて、俊介さんを悼む句が多かった。

前句、引鶴の季節は天候も不順である。そうしたある日、晴れ上がった大空を鶴が帰ってゆく。引鶴の姿には、帰雁や引鴨より大らかな清潔さがある。その引鶴を仰ぎつつ、作者は俊介さんとの別れを悼む。「とどむる雲」の一片だけに無いというところに、その思いが遍くこめられている。後句、「喪ごころに磨る薄墨」が全てを語っている。六月号の俊介さんへの追悼文も意を尽していた。「薄墨」の効果は大きい。古くは勅命の編旨は「薄墨紙」に書いたとある。「喪ごころ」を身の内にいざない、かつての朋友を偲ぶ思いが、「暮春かな」に包まれている。

紅茶のお独りの春の昼下り 山内 四郎

俳句のこころは日常の些事にある。些事が季節感を得た

季語と相俟つて、俳句という詩型を形作るのだ。併しその些事をキャッチ出来るのは、日頃の精進あつてのこと。作者は珈琲より紅茶が好みなのか。「春の昼下り」が何とも善い。そののびやかな空間で、ひとり紅茶を淹れる作者の姿が、画中の人物のように浮かんできくる。

こでまりや傘雨忌近き千住宿

鷹崎由未子

今年の燈下会総会は、四月二八日、北千住駅隣接の丸井ビル一〇階で催された。西の窓からは隅田川の流れが蛇行して見下ろされる。北側には荒川が流れている。三二〇年前の「弥生も末の七日」、今年の暦では四月二六日、芭蕉は曾良を供にこの地の辺りから、ほそ道の旅に出たのだ。会場からわずかな所に旧日光街道がある。この旧道そのものはどこにでもある町筋の道だが、一歩路地に入ると、ひととき時代を後戻りしたような錯覚を覚える。

作者はその古街道を歩きながら、ふと来週は久保田先生の命日だと思う。「千住宿」は、往事、日光街道の第一宿として繁栄した所。最近北千住という地は、若もの達に人氣が高くなっているという。季語の「こでまり」が一句を良く支えている。

街道や雀隠れに遊女塚

鈴木 鳳来

前句と同日の作品。「雀隠れ」は、晩春草木の葉が雀が

身を隠す程伸びた景を指す。往時千住宿には、場所柄遊女屋も多かった。その女性の多くは、斃れても路傍の塚と変わるのみ。そういう一つが、沿道の古寺に今も残っていたのだろう。丈低い遊女の塚に寄せる思いがよく出ている。

射抜かれて目無し目刺の涙かな

中野 英伴

「目刺」は昔から馴染の食品。しかしこの句には、目刺一般の意にないものが二つある。「射抜かれて」と「涙」。作者は五月上旬まで入院加療中だった。この句、その入院されていた時の作品。「射抜かれて」に無念の思いが滲む。「涙かな」はその思いを反芻する一語。この句を読んでいると、その無念さが紙背を透して響く。只ただご快癒を願うばかりだ。しかし目刺に心境を託す作者の「俳魂」という意志には、深く敬意を表する。

もとほれば詩神に逢はん春の夢

呉 文宗

「もとほる」は、めぐる。「詩神」は例えば芭蕉と見ていいだろう。「春の夢」は、短くはかないことの喩え。

しかしこの句は字句の解釈で鑑賞される作品と言うより朗々唱するところに持味のある句である。最近こういう型の句を見るのが少なくなってきた。作者は台北句会から出句されている五人の作家の一人。